

草が錦の褥を織り、虫聲唧々秋の歌を謡つてゐるのです。造化は自分等を樂まさせるべく、こゝに秋と云ふ清涼の好季を興へ、たまはつたのではありませんか。それに對して徒らに悲しむのは、禮を盡したものと云へませう。

憂ある人よ、悲しむの人よ、將に又歎き煩ふの人よ、心を平かにして清涼の天と、靜寂の野に、嘯けそして無邊大なる、天地と、同化せよ其處に卿は慰を得るのであらう、同情を興へられるであらう。斬うして卿の憂ひ、卿の悲しみ、卿の歎のき煩ひは、拭はれ散せらるゝに相違無い。そして秋の樂しさを、しみたくと思ひ感じ、味はされるに相違無いと思ひます。

我々一同は此の時節に臨みて學びの海にと漕出で、亦も再び漕行くのであります。



魂の叫び

中 林 良 陽

童等小流より鮒を捕へ來りて將に炮らむとするに、彼れ尙泡を吹いて依然たり。ああ、鮒や鮒や、汝うつせみの世に生れながら、世を憂きものとも觀じやらで、ひと瞬の間も猶生を貪らむとはするか。さても幸の極なるよ。

げに世は果敢なきものなりき。釋迦や彼れ、無上正覺を成じて法身の常住を叫ぶと雖も、沙羅双樹の花の色は、遂に遷りにしを奈何。奈翁や彼れ、盛名を史典を残すとも、セント・ヘレナの白露は、遂に消え失せぬるを奈何。おゝ果敢な人の世や、斯くて我れ何處より來り、何處へ去らむとはするぞ。

我れ嘗て富士の高嶺に登りき。登りて大いなる自然に接したりき。嗚呼、山や空や永しへに依然として變

らざるものを、人のみなどで斯くは生死の巷に流轉せざるべからざるか。憶へば傷ましきの極なる哉。
されど見ずや、朝に、輝き渡る旭日に向ひて、啞啞と飛び行く鳥の群を。夕に、月を宿せる白露を擔へる
萩姫を。汝何が故に爾く世を果敢なむぞ、善く食ひ善く飲む、これ人生の事實に非ずやと。——斯くて我が
魂は慰められ、黙して止みにき。



歩むべき道

四 寛 涙 草

人生それは悲惨な人間苦の事實である。

苦しみの過去の人間生活から未來への苦しみの人間生活へと進む旅程ではあるまいか、生きようと願ふ……それには悲惨な人類相闘の苦しみの劇が畫出されずにはをかれぬ。弱肉強食の事實が畫かれてゐるのは人間ばかりではない、野に咲く名も知らない可憐な草花にも、空飛ぶ鳥にも生を欲しながらも悲愴な生に對する事實を認めすには置かれぬ、まして人生には必然の事である。

生きることを欲しつゝもズル／＼と時の力に引きつられて、暗黒へと導かれ行くはかない運命の持主が人生ではあるまいか、生きることを願ひつゝもロソクの火のいつの間にか燃え盡して消え行くごとく、……しかし風に揺がれつゝも消えまいともがきながら燃え續ける、そして彼自身の身を燃やし乍ら餘燼かすかになる微光までも消えまいともがき終には暗黒の世界を造る、丁度人生もロソクの火のやうに終には消え失せ